木造阿弥陀如来及両脇侍像

［登録年月日］昭和六一年三月三一日
［種別］有形文化財（彫刻）
［名称］木造阿弥陀如来及両脇侍像
［点数］三軀
［所有者等］善福寺
［所在地等］善福寺四―三―六

有形文化財（彫刻）

木造阿弥陀如来及両脇侍像

善福寺の本尊である阿弥陀如来（中尊）は像高八四・八㎝、臂張二七・四㎝、観音菩薩（左脇侍）は像高六〇・九㎝、臂張一八㎝、勢至菩薩は像高六一・五㎝、臂張一八㎝のいわゆる来迎の阿弥陀三尊である。いずれも檜材の寄木造りで漆箔仕上げ、玉眼嵌入の技法になるものである。

中尊の阿弥陀如来は顔をやや前に傾け、細くつり気味の眼を刻む丸顔の表情に沈静の趣がただよう。総じて鎌倉時代に完成された如来形立像形式の伝統をくむものであるが、形式的誇張も見られ、室町時代後期の造像と推定される。

観音・勢至の両脇侍は表情や衣文表現が柔らかく、その平明で手慣れた作風から江戸時代後期の職人仏師の作と思われる。

『新編武蔵風土記稿』に記載されている「本尊弥陀の立像にて長二尺七寸、脇侍観音勢至共に木の立像にて長一尺八寸」の仏像は、おそらくこの三尊像と考えられ、すでに江戸時代から知られていたことがわかる。

なお、善福寺はかって福寿庵と称していた寺院で、現在の寺号に改めたのは昭和に入ってからである。

【文化財所在地】